〔書評と紹介〕

原　實

学問は日進月歩で，一時たりとも停まる事がない。毎週，地球の何処からか送られて来る書籍，論文の抜刷りの類はそれらを追うに必ずしも容易でないが，さりとてそれらを等閑に付す事は許されない。出版社からは所謂 Review Copy として送られてくるものもあり，それらに対しては本邦に紹介する義務が伴う。

その中，専門分野に近いものは当然厳密な書評の対象となり，筆者はそれらを Indo-Iranian Journal, Orientalistische Literaturzeitung, 東洋学報等に掲載している。しかしながら，専門分野を離れても，その中で優れたものは，たとえ簡略な形に於いてでも，紹介に値すると思われる。選択の基準は必ずしも厳密には立て難く，紹介の密度にも濃淡のある事は筆者自ら自覚しているが，識者の要望に応えてここに幾つか紹介する事とした。この機会を与えられた久留宮円秀博士に深甚なる謝意を表する。ただ，今回は執筆に僅か10日の猶予を与えられたに過ぎなかったから，仏教学を中心に論文集2，著書1，論文3を紹介するに留める。

(1) ***Indian Studies (Selected Papers) by Gustav Roth,*** edited by H. Bechert and P. Kieffer-Pülz, Bibliotheca Indo Buddhica No. 32, Sri Satguru Publications, Delhi, 1986. pp. i-xxxv. 1-468.

西洋のインド学者の中で最も永くインドに滞在し，Patna を中心にインド人学者に数多くの友人を有してその信望を一身に集め，1982には Nava Nalanda Mahavihara の学頭就任の栄誉を担った Gustav ji Roth の70歳の誕生日を記念して，彼とゆかりの深い Göttingen 大学のインド学・仏教学研究室は先年彼の論文論説27と書評8を選び，一書に纏めてインドより刊行した。本邦に於いても *Bhikṣuṇī-Vinaya* (Patna 1970), Patna-dharmapada (*Die Sprache der ältesten buddhistischen Überlieferung*, ed. by H. Bechert, Göttingen 1980=本書2A, pp. 289-350) を始めとして説出世部の研究論文や，Stūpa の研究により知る人も多いが，彼の専門はジャイナ教文献より，中期インド・アリアン語学，文学，更にインド美術史に及ぶ。

その略歴が自筆によって興味深く綴られた (ix-xxiv) 後に，著書論文論説47，書評9を列挙する著述目録 (xxvi-xxxiii) は彼の学問の全体を彷彿させるのに充分である。その中には，E. Waldschmidt 生誕80歳祝辞(11)，Göttingen のサンスクリット研究150年(14)，L. Alsdorf 追悼(16)といった個人や研究所を顕彰するもの，また中期インド・アリアン語(18)，ジャイナ文献(19)を概説したものも含まれているが，それら以外は全て高度に専門的な研究論文である。特に仏教学に関連するものとして説出世部 (Ārya Mahāsaṁghika-lokottaravādin) の Vinaya 文献の言語，語法に関するもの(5，7，21，24)，Bodhisattvabhūmi 第一章(12)，Stūpa 研究(22, 23)，聖者誕生譚一般との比較における仏誕伝説研究(26)等が挙げられよう。書評も或るもの (Lin Li-Kouang, *Dharma-samuccaya*, D. S. Ruegg の如来蔵研究二篇) は長文にわたり，全て極めて学問的，良心的なものばかりである。巻末は語彙索引 (pp. 457-468) 図像29によって締め括られる。

(2) K. R. Norman, ***Collected Papers,*** Volume I, published by The Pali Text Society, Oxford 1990. pp. i-xvi, 1-271.

周知のとおり著者は現在ケンブリッジ大学教授で，今年その最終年を迎える。著者は1969-71の間に *Elders' Verses* 2冊によって厳密な Pali 文献学者の令名を国の内外に馳せ，1982年には J. Gonda の History of Indian Literature の企画に参加して *Pali Literature* を上梓し，斯学の標準的参考書を世に送った。又，久しく Pali Text Society の会長，Copenhagen の Critical Pali Dictionary の主幹としてその発展に貢献したことは周知の事実である。本書は The Pali Text Society が彼の65歳の誕生日を記念して1956年より1977年にいたる20年間，諸種の学術雑誌，記念論集に発表した30の論文を一書にまとめたものである。既述の G. Roth のそれと同様に，学術雑誌の中には既に入手困難となったものもあるから，

碩学の論文が一書にまとめられる事はドイツの Glasenapp Stiftung の例に洩れず，後学に裨益するところ極めて大なるものがある。

30の論文はほぼ発表年代の順を追ってならべられているが，著者は必要に応じて加筆訂正（Postscript）しているから，今回の出版はただ単なる集録以上のものがある。それらは *Middle Indo-Aryan Studies* と銘打って，Baroda Oriental Institute の雑誌に発表したもの12（I-XIII, XII は次号）を始めとして Ardha-māgadhī, Pali, Aśoka 王碑文の言語に亘る中期インド・アリアン語を対象とし，その音論，語彙，統語法の諸問題を論じている。本書はインド語，イラン語，ギリシャ語，ラテン語の語彙索引（pp. 263-271）で終わっている。

尚，彼の論文集は全四巻で完結する予定で，第二巻は既に刊行され，第三巻は目下印刷中，第四巻は準備中と聞く。

(3) Kenneth G. Zysk, ***Asceticism and Healing in Ancient India,*** Medicine in the Buddhist Monastery (Oxford University Press, 1991) pp. 1-200.

標題よりしてシャーマンの呪法と治病の実態を予想させるが，内容は仏典を中心として紀元前800年より100年に到る時代のインド医学の発展を辿る。Atharvaveda に淵源する呪術的治病法（magico-religious healing）を前8世紀以前に，Caraka, Suçruta, Bhela に見られる経験的合理的治療法（empirico-rational）を前2世紀以後に措定して，その間に所謂『沙門道』（śramaṇa），なかんずく仏教とその教団の発達を置いて，そこに呪術と科学の橋渡し的役割を見ようとする。仏教のインド医学への貢献はかつて岩本裕博士が指摘し，矢野道雄氏も認める所（インド医学概論 p. xix）であるが，本書はこの点を系統的に論じた。

第一章は Rigveda の医神 Aśvin 双神の地位，法典その他に見える医者の軽視に徴して，もと医療が正統バラモン系統に異質で，医の伝統は本来異端の宗教（沙門道）に本質的であったと見る。律蔵大品薬犍度章の記述，不浄観と解剖学的知識，仏と大医王，四聖諦と診断・治療との類似，四依中の陳棄薬，Jīvaka 伝説，サンガに於ける病人の処置，養病坊，悲田院等，社会福祉と仏教の問題，中央アジア出土仏典の性格，仏教の中国伝播と医術・治病の連関，大乗仏教の薬師信仰等を順次概観し，又他の宗教に見られる『伝道と治病』の問題を論ずる。

第二章は初期仏教教団の薬事（Materia Medica，五薬その他），Pilindavaccha の故事を中心として，疥癬，魔憑，眼病等の病の列挙と対治の実態を述べ，その記述と医典，なかんずく Suśruta との類似を指摘する。Buddhaghosa の大品注とこれら医典の記述の比較は将来の問題となろう。巻末は二つの補遺（Jīvaka's Cures, Glossary of Pali and Sanskrit Plant Names），文献目録，索引によって締め括られる。

(4) Heinrich von Stietencron, "Die Rolle des Vaters im Hinduismus," ***Vaterbild in Kulturen Asiens, Afrikas, and Ozeaniens,*** herausgegeben von H. Tellenbach (Stuttgart 1979) pp. 51-72 und 170-171.

男子を儲けるは死後天界を得る道，梵語 putra（息子）は古代インドの通俗語源学に於いて put と名付ける地獄から父祖を救出する者（trā-）と分析されるのは周知の事実である。祖先祭（śrāddha）は息子の義務であり，法典は長子相続を規定するから，親子，なかんずく父と息子の問題は古代インド人の主要関心事であった事は明らかである。

しかしながら，他面『業』（karman）の思想は一切を個人の責任に帰すから，俗にいう親子の絆なるものは元来その世界観には介入の余地がない筈である。生まれるのも死ぬのも，又死後天国に行くも地獄へ赴くも全て個人の責任で，息子とても父の運命を左右し得ない。親の善行や罪を子が相続する如きはインドには無縁の思想であった。父は又，古く教師の役割を以てその権威としたが，職業的教師の出現は父の権威を失墜せしめるに充分であった。かてて加えてインドの大家族主義は『父』よりもむしろ『祖父』の権威を高からしめた。これらの要素（業の思想，専門的教師の出現，大家族主義）は理論的に『父』を子の絆より解離し，また『父親の役割』を低下せしめ，その権威を失墜せしめたと著者は言う。古代インドにあって，創造主梵天を pitā-maha と言ってもかつて pitr と言わなかった所以をここに著者は見ようとする。

(5) Nalini Balbir, "Le discours étymologique dans l'hétérodoxie indienne," ***Discours éty-***

mologiques. Actes du Colloque international, organisé à l'occasion du centenaire de la naissance de Walther von Wartburg, Bále, Freiburg i. Br. Mulhouse, 16-18 mai 1988, Edités par Jean-Pierre Chambon et Georges Lüdi avec la collaboration de Hans-Martin Gauger, Frank Lestringant, Georges Pinault, Max Niemeyer Verlag, Tübingen 1991, pp. 121-134.

古代インド，なかんずくブラーフマナ文献には所謂通俗語源学と称する語源分析が見られる。事物とその名称とはもと一体にして不可分と考えられていたから，分析によって名称の本質を究める事はそのまま事物の本質に迫る所以と考えられていた。同種の試みが異端の宗教，なかんずく仏教に於いて如何ように為されていたか，ここに Buddhaghosa と Aggavamsa を中心に解説される。読者は仏典の語源分析が正統バラモン文献のそれと趣きを異にしている事をここに見出すであろう。例えば，araha (t) (阿羅漢) を通常の『殺賊(arihan)』『応供 (arahati)』の他，ārakā (副詞，〔一切煩悩〕遠離)，a-raha (密かに〔悪事をなさ〕ず)，a-ruhanta (〔業滅尽故に再生の芽〕生えず)，a-raha (ratha) (無車) となす類である。正統バラモンへの対抗意識を反映するものとして putra と brāhmaṇa の語源分析がある。前者は既述の『地獄より父祖を救い出す』とせず，punāti (〔家を〕浄化する者)，pūreti (〔父の心を〕満たす者) と為し，後者，即ち brāhmaṇa (māhaṇa) は bāhita-pāpa (悪疎外，悪遠離)，又，māhaṇa は mā hana (殺す勿れ) と分解される。bhikkhu も『〔輪廻に〕恐怖を見る者 (saṁsāre bhayam ikkhati)』となす。この他 bhagavan, kusala, hāra, tāyin の諸語が論じられる。Prakrit 語に於ける二子音の同化は Sanskrit 語におけるよりもこの種の語源分析により多様な幅と可能性を与えている。又，この種の語源分析は中期インド・アリアンの語の音韻史研究にも示唆する所がある。

(6) Dieter Schlingloff, "Traditions of Indian Narrative Painting in Central Asia," ***Akṣayanīvi,*** Essays presented to Dr. Debala Mitra, editor G. Bhattacharya, Indian Book Centre (Delhi 1991) pp. 163-169 with 7 figures.

図像 (Bild) と物語 (Erzählung) との比定は美術史と文献学の接点として，インド学勃興の初期からヨーロッパの学者の関心をひいた。現在ミュンヘン大学に講筵をはる D. Schlingloff はもと中央アジア出土梵文仏典写本の研究に優れた貢献をなしたが，同時に A. von Le Coq, A. Grünwedel, E. Waldschmidt の学統を承け，インド学のこの分野においても第一人者として知られている。ここに扱われる中央アジア Kizil 石窟の壁画は Ajanta のそれとほぼ同時代 (五世紀後半) で，題材も同様に Jātaka, Avadāna (Śaśa-, Śibi-, Vyāghrī-, Ruru 等) の類より取り，描出の手法も類似している。著者はここで Kizil 壁画の中より二を取り出して，それらと Pūrṇa-avadāna (Zebucart-hall) 及び Sudhanakumāra-avadāna の物語 (Devils' cave A) の二を比定している。文末は両石窟の構図と，壁画の線描を画いてその下に物語を綴って解説している。尚，同博士の過去15年のこの種の研究論文24は近時 *Studies in the Ajanta Paintings, Identifications and Interpretations* と題して一書にまとめられ，インドより出版されている (Ajanta Publications, Delhi 1988)。